

山・川・海
命の絆

堀 由紀子

ほり ゆきこ

新江ノ島水族館 館長

古里は遠きにありて思うものという詩があるが私の故郷は岐阜県加茂郡白川町である。むろん東京生まれではあったが本籍は父の実家であり、実際に太平洋戦争中には三才から五才の終戦まで疎開し、山深きその里で思う存分野山を駆けめぐり、田んぼのあぜ道でよく摘み草をした。黒川村(現白川町)には多様な川がありそこは飛騨川の奥地であるが赤川、蛭川、等、特色ある名がつけられ、柿反淵という比較的浅くゆるやかな流れの中で水遊びをし、鳥を仕掛ける鳥屋で、今では希少種になっているつぐみ等を持ち帰り、翹づけにして御馳走として頂くのが楽しみであった。

それが思いがけず平成16年4月、新江ノ島水族館が新装オープンした同年の7月に岐阜県世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふを岐阜県より運営を受託し、まかされる事になった。古里が身近に甦ってきたのである。

各務原市に所在するその淡水水族館は木曾三川である木曾川・揖斐川・長良川と濃尾平野を潤す日本の代表的河川である。特に魚類が豊富な長良川をメインに取り上げ、世界の代表的な河川の生物を公開している。

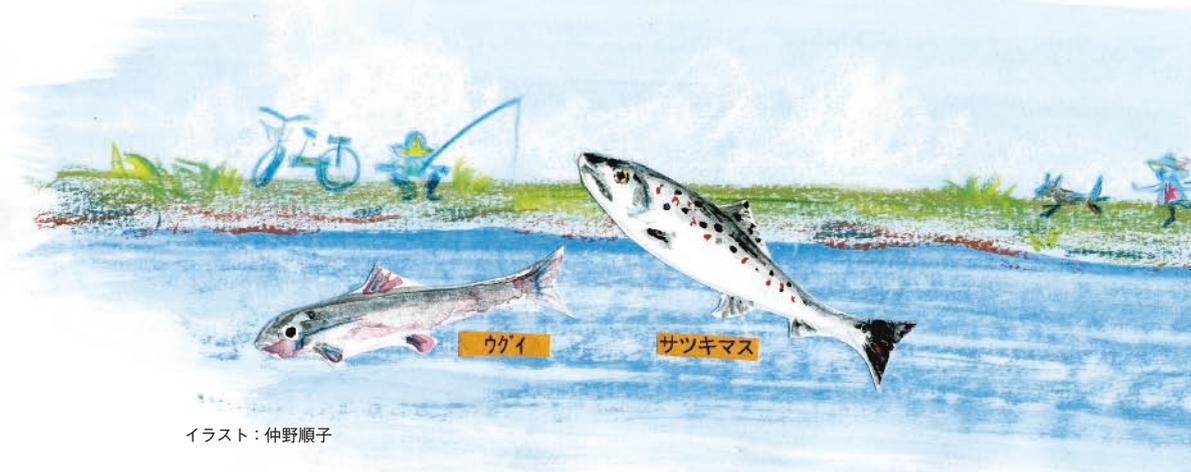
長良川は石川、福井、岐阜の三県の境を重ねる両白山地の大日岳を源とする全長126kmと流域面積2,040

km²の川で岐阜県をほぼ南北に縦貫し、河口で揖斐川、木曾川と共に伊勢湾に注がれる。長良川の鵜飼はことさら有名である。そこで川の歴史を学び知る上で木曾三川文化研究会が出版した「木曾三川に生きる」(平成2年)をひもといてみた。

昔から洪水のたびに流路を変え、濃尾平野を縦横無尽に入り乱れて流れ、毎年のように流域による洪水の被害が発生していた。その災害と治水は1380年代から記録されている。輪中提は洪水被害から守る人々の地先の自衛的手段として築かれた。

➡ れに対し線的な改修として本格的に取組んだのは宝暦年間の薩摩藩による御手伝普請が上げられる。その三川分流の先駆けとなった史実は、NHK「その時歴史が動いた」でも放映されたことがあるが、まことに感動的であった。

明治維新となり治水は国の重要課題として取り上げられ、オランダ人ヨハネス・デ・レーケを招き、木曾川水系の三川分流を主体とした改修計画を立案した。しかしデ・レーケはそれに先立ち基礎的治山を重視し、崩壊土砂の流出に抑制力を注ぐことを重要とし、水利、護岸、工事、の実施について指導した。まさに砂防、地すべりの取り組みの先陣を彷彿させるもの



イラスト：仲野順子

であった。先に上げた三川分流の礎は特に歴史的には尾張名古屋藩が戦略的備えとして、木曾川左岸に堅固な堤防を築いて守りの堀とした。このため美濃側の右岸は大雨のたびに決壊し洪水の被害を受け1700年代、再度幕府に嘆願を繰り返した。宝暦三年十二月九代将軍家重は美濃、尾張、伊勢三国にまたがる治水工事を外様大名薩摩藩島津家に命じ、日本初ともいうべき三川分流を実施した。薩摩藩総奉行の平田靱負は総勢947人を率いて幕府の命に死闘ともいえる難工事を、その英知と努力を結集させたのである。彼は「自分たちの土地ではないが、皇土であるのでその人たちに尽くすのだ」と申し述べ先駆的改修を完成し1755年非業の運命の部下たちを思い自害し悲壮の最期を告げたのである。その霊に報いるよう平田町と地名が記念として残され、平田氏の偉業を讃え治水神社が建てられ、その宝暦治水の縁で鹿児島県と岐阜県は姉妹県として交流がなされている。感涙すべく尊い記録は、今日環境異変が顕在化している中未来に向けて治山、治水、防災等の整備を心して行わなければと改めて実感した。

さて岐阜県世界淡水魚園水族館は東海北陸自動車道が木曾川を渡る川島笠田町の広大な河川環境

楽園にあり国営公園と岐阜県営公園が一体となった一角に川をテーマとした公園(58ヘクタール)である。河川環境をあらゆる角度で展示公開している場は世界でも類をみない。山紫水明の豊かな自然と共に「自然共生センター」があり木曾三川の歴史に鑑み、河川湖沼の自然環境の保全と復元の研究を行う場であり、水辺環境を創出してそこに木曾川の「河原の景」「大河の景」を再現している。「自然発見館」の参加体験学習施設や岐阜県の希少な魚を保全する河川環境研究所もあり河川と生物について多様な施設を有している。

水族館は日本の淡水魚ばかりでなく世界の淡水魚を含め広大な河川を持つアジア、アフリカの代表的な河川の紹介も意図している。長良川の源流から河口域までと中国の揚子江、タイのメコン川、アフリカのコンゴ川とタンガニーカ湖、南米のアマゾン川の生物たちである。魚類だけでなく昆虫、鳥類、小動物、水生植物等も総合的に公開した。環境の視点で生態系の展示を重視した。この基本的な創案は(財)自然環境センター理事長の多紀保彦先生の指導のもとに計画されたものである。いわゆる淡水生物の地理学的分布を考察し、日本の淡水魚はどこから来たのが等、各国の魚類も比較することが出来る。学術面に偏らず家族で楽しめるエデュテイメント(エンターテイメントとエデュケーション)施設に心を砕いた。

淡水魚は全地球の魚類約三万種いる中でその1/3約1万種をしめている。地球の水が海水96.5%のうち氷山を除く、河川湖沼が占める2%弱の水の中にこれ程多様に種が生息しているのである。海水と比較して陸域が上下河口域から湿原、熱帯雨林、

砂漠、氷山等、環境があまりにも多様であり、それぞれに進化した生き物である。

大繁栄したグループの魚はコイ目、ナマズ目、カラシン目で、カラシンは南米のピラーニャや熱帯魚が多い。次にカワスズメ科でエンジェルフィッシュや、日本では食用にされるティラピア等である。次に多いのがカダヤシ目で熱帯の魚として馴染み深いグッピーやソードテール等である。次にオッセログラツサムのアロワナ類である。

日本の淡水魚はおよそアジア起源と言えるが、東日本はシベリア、サハリンなどの北方系、西日本ではそのルーツは中国大陸、朝鮮半島といえる。つまり大陸移動説によると約三億年前までは大陸は一つにつながっていたと考えられる。南半球の巨大大陸はゴンドワナ大陸として形成されていた。約三千万年から一千万年前頃に次第に現在のように大陸が形成され日本列島が大陸とはなれて日本海が誕生したのである。プレートテクトニクスの活動によるものである。壮大な地球の地殻変動のドラマでもある。日本の河川は急峻で長さもそれ程無く、信濃川で367kmである。それと比較して世界の河川はアマゾン川、揚子江、メコン川、など20倍と全長も流量も海のごとくである。日本の淡水魚の最大は北海道に棲むイトウ(サケ科)で1m強であるが、メコン川のコナマズは3mを超え300kgと巨大であり南方系に多大に成長したものが多い。しかし残念ながら淡水魚類は陸域の様々な影響を受け、例えば河川の開発、汚染、湿地の減少、乱獲など絶滅危惧種になるものが増大しており、これを保全することが水族館にとって最大の役割となって来ている。まさに生物多様性維持への挑戦である。

